

新型コロナ感染流行期における維持透析患者の在宅看取りの意義～『終末期の積極的メンタルケア』への取組み

医療法人衆和会 長崎腎病院 長崎腎クリニック

○藤原久子 林田めぐみ 戸村秀志 山口貢正 河津多代 澤瀬健次 橋口純一郎 原田孝司 船越 哲

【はじめに】

重度の心不全等で透析の継続が不能となった場合、これまで当院では入院患者の看取り期として、家族と共に最期の時間を過ごすため病棟の個室を提供していた。しかし、新型コロナ感染流行期には面会禁止となり、看取りの場を提供できなくなった。これに対し、2021年9月より『終末期の積極的メンタルケア』の考案のもと、透析患者の終末期ケアに精通している在宅医と連携し、在宅または当院敷設の特別養護老人ホーム(全個室)での看取りの情報提供を積極的に行った。

【結果】

当院での2017年以降の平均年間死亡者数は58人であり、うち在宅での看取りは年間0-1名であった。一方、2021年9月から半年間の死亡者38名中、在宅で看取りを行った症例は9名に増加し、患者家族全員から深い感謝の言葉を受けた。看取り体制から死亡までの平均期間は4.2日(1～10日)、死亡場所は自宅が5名、特養が4名であった。特養での看取りに際しては、居室で家族と過ごしてもらったが、移動時の動線やワクチン接種済などにつき十分注意を払った。

【考察】

新型コロナ感染流行期で終末期においても面会制限となったが、この機会があったからこそ、我々の目指す『終末期の積極的メンタルケア』へ進歩できたと考える。